

単純な正義を疑うこと

——島崎藤村『夜明け前』を読む

校長 小川幸司

1 新しい日本語を作った人

長い間、人類は、どの家に生まれたかで、その人の身分や職業が決まっているような社会の中で生きてきました。日本でも江戸時代まではそうだったわけで、公儀（江戸幕府）の権威のもとで、人々は身分によって秩序付けられていました。

それは文字を読み、書くという日常の行為に対しても、万人がそれを自由にできたわけではないというところに表れていました。確かに江戸時代の日本では、世界の中でも寺子屋などで人々が学ぶ比率が高かったため、農民や町人たちの中には読み書きが自在にできた人もいました。しかし当時の日本の書き言葉は、漢文・古文ですから、明治の初めの岩国藩の報告書では、漢字の読み書きができる民衆は0.1%以下にとどまっていた。

多くの人々が読み書きをできるようになったのは、江戸時代の身分制社会から明治の文明開化へと、日本が大きく転換する中です。義務教育が始まるとともに、言文一致（話し言葉に近い口語体で文章を書くこと）を作家たちが小説で実践するようになっていきました。しかしこれは簡単なことではありません。「木曾路はさながら山の中なり」と古文で書いていたのを、「木曾路ってどこ行っても山の中だなあ」と話し言葉そのまま書いても落ち着きません。

ならば新しい日本語の文章を作るしかありません。「木曾路はすべて山の中である」と書く日本語が発明されていくのです。こうして書き言葉の日本語を駆使して、美しい自然の風景や、家によって縛られない自由な恋愛のありようを小説・エッセイにし、日本社会に大きな旋風を巻き起こした作家が登場しました。それが、島崎藤村（本名は島崎春樹、1872～1943）です。

島崎藤村は、現在の中津川市馬籠の出身です。かつて馬籠は長野県木曾郡山口村であり、山口村は蘇南高校設立を実現した五つの村のひとつです。藤村のお孫さんが、本校の美術の先生をつとめていたこともあります。藤村は、中津川にとっても木曾にとっても、この地域に生まれて歴史に大きな業績を残した大先輩なのです。

2 明治維新に裏切られた父親を描いた『夜明け前』

島崎藤村の代表作は、何と言っても『夜明け前』です。これは1935年に完結した、藤村が生涯の最後に完成させた大長編小説で、岩波文庫でも全4巻、約1300ページに及びます。主人公は馬籠の本陣を親から引き継いだ青山半蔵という人物。藤村の実父がモデルになっており、実際に起こったことをもとに、そこにフィクションをおりまぜながら小説が書かれました。小説の舞台は馬籠を中心に、半蔵の親戚や友人たちがいる妻籠（今は南木曾町）と中津川です。

『夜明け前』の書き出しの場面が有名です。こう始まるのです。

——木曾路はすべて山の中である。あるところは岨(そば)づたいに行く崖の道であり、あるところは数十間の深さに沈む木曾川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入り口である。一筋の街道はこの深い森林地帯を貫いていた。

わずかこれだけの文の中に、この大長編小説の人々の生き方が見事に描かれています。とても険しい山の中で木曾の人々は生きているのですが、この木曾には中山道という主要な道が、山を越え、崖や山に沿って、ほぼまっすぐに走っています。だから木曾の人々は山の中にこもっているのではなく、この森の中から中山道を利用して日本全国に旅をして、活躍をしていくのです。

馬籠や妻籠の人々は、江戸時代の大名たちの参勤交代への協力や街道を維持するための労役や納税を、福島(今は木曾町)にいる尾張藩の代官から次々と命ぜられていました。この地域の一大産業になるべき林業にしても、ヒノキなどの伐採を厳しく禁じられ、「木一本首一つ、枝一本腕一つ」と言われていました。そのような厳しい身分制社会の中、日本本来のものの考え方にたちかえっていけば、武士や仏教の世の中とは異なる、天皇を中心にして人々がもっと大切にされる社会がうまれるはずだという考え方(これを国学と言います)が、青山半蔵や友人たちの間に広がっていきました。このような天皇中心主義は、のちのアジア・太平洋戦争の時代になると、国民は天皇のために命をかけて戦うべきだという軍国主義思想になりました。しかし、江戸時代末期の半蔵たちが信条にした国学は、天皇は神の子孫であるから特別だが、天皇以外の人々は「平等」なのだということに力点が置かれていました。

江戸幕府を倒して天皇中心の新政府を作ろうとする討幕運動が、長州藩や京都の公家のなかで盛り上がり、江戸ではなく京都がにわかに政治の舞台になります。すると江戸よりも遥かに京都に近い馬籠が、日本の最先端の情報をいち早く入手できる場所になり、青山半蔵たちを討幕運動にかりたてました。

いくつもの革命軍が組織され、この馬籠や妻籠を通過していきました。天狗党、赤報隊…いずれも彼らに関われば幕府から死罪を宣告されるであろう、危険人物たちを、半蔵たちは匿って、食糧を与え、逃がしていきました。日本の「夜明け」を願ってのいのちがけの行動です。そして薩摩藩・長州藩と幕府の対立は、徳川慶喜の大政奉還によって、あっけない決着をみました。明治維新の始まりです。

しかし薩摩・長州・公家を中心とする新政府が目指したのは、経済と軍事に強い日本国家を建設することであって、普通の人々の暮らしを楽に豊かにすることではなかった。容赦なく税金をとりたてたし、ようやく人々のもとに戻ってくるかに思われた木曾の山林は国有地に没収されてしまい、人々の立ち入りができなくなってしまったのでした。革命に裏切られたと思った半蔵は、新政府に抗議を繰り返し、やがて馬籠村の代表である戸長という役職も解任されてしまいます。

半蔵は生活のために東京に出て、神社を中心とする新しい宗教体制をつくるための仕事に就きますが、新政府はヨーロッパやアメリカとつきあうためにキリスト教を否定しないということがわかります。半蔵は落胆してこの仕事も辞めてしまいます。岐阜県の飛騨地方で神社の神主をしたりして馬籠に戻ってきた半蔵は、自宅の隣にある仏教のお寺に放火をしてしまい、村の人々や家族の心配から家の中に作られた座敷牢に閉じ込められ、病を得て死んでいきました。半蔵は「わたしはおてんとうさまも見ずに

死ぬ」とつぶやきながら、死んでいったのです。人々は明治維新によって「夜明け」が来ると思っていたわけですが、実はまだ「夜明け」が日本社会には来ていないのではないかという問いかけで、この大長編小説の幕は閉じられます。

3 単純な正義を疑う精神

島崎藤村は、実際にそのように亡くなった父親のことを、父親の苦しみに寄り添いながらこの小説を書きました。革命（当時の表現をすれば御一新）によって文明開化・富国強兵の新しい日本が生み出されたのですが、それは人々にとっての「夜明け」ではないという藤村の厳しいまなざしがそこにはあります。実際に日本の富国強兵路線は、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦と戦争を連続させ、ついにはアジア・太平洋戦争の破局に至りました。

では、藤村は自分の父親に正義があると思っていたかということ、父親のまっすぐな考え方は物事を単純化していて、そこにも大きな問題があるかを見ていました。天皇中心で神道しか認めないような世界観では、多様な考え方をもっている世界の人々とともに生きていくことができないのです。父親、青山半蔵の生き方によっても夜明けを生み出すことはできないと、藤村は見ていたのです。

ひるがえって、2021年の現代に視点を移しましょう。日本は世界経済から見たときの長い停滞、深刻な少子高齢化、はどめのかからない財政悪化（赤字国債の増加）、新型コロナウイルス感染症の断続的な流行に悩み続けています。そしてそれらについて、様々な政治家、学者、企業経営者たちが、こうすれば「夜明け」がくるはずだという解決策を提唱しています。

島崎藤村のまなざしからすれば、それは本当に普通のひとびとのためになるのか、そうでなければ「夜明け前」にすぎないと、支配的な考え方を自分のまなざしで問い直すことが必要なのです。そして、政治家、学者、企業経営者たちの解決策に「それではだめだ」と批判的な意見を持ったとしても、その自分自身が物事を単純化していないのか、自分自身も「夜明け前」ではないのかを問い直すべきなのです。

これを私は、「単純な正義を疑う精神」と名付けたいと思います。

4 人間の複雑な心を見つめる

では、何が正義なのでしょう。『夜明け前』の小説を読んで私が思うのは、第一に「弱い立場にある人々」のことを考えているかということ、第二に人間が「複雑な存在」であることをふまえているかということが、単純な正義に陥らないために大切な視点ではないかということです。青山半蔵が尊敬する国学の学者（田中大秀という人）の思想について考える場面で、藤村はこう書いています。

——半蔵が聞きつけたのも、この声だ。かなしみの奥のほほえみ、涙の奥の笑だ。

なぜ、このような声が必要なのかと言うと、新しい時代を作る人は必ず周囲とたたかい、傷つくことになる。だから、成長する子どもに大き目の服を用意してあげるように、

傷つくことに備えて、人間とはこういうものだと思っておくことが大切なのだ…こう藤村は文章を続けるのです。

このさりげない表現に、藤村の思いが凝縮されているように思えてなりません。かなしみの奥のほほえみが見えているか。涙の奥に笑いがあることを見えているか。それが人間だろうと、この小説は語りかけてきます。

皆さんは、これから絶望のどん底に落とされたような悲しい経験をするでしょう。でもそんなときでも人間は、どこかにほほえむ気持ちとか笑う心が存在している。それを見つめて生きていくことが大切だと藤村は言うのです。それを見つめられるのであれば、「単純な正義を疑う精神」をもつことができるでしょう。

「かなしみの奥のほほえみ、涙の奥の笑」という言葉は、小説『夜明け前』の中のとびきり美しい言葉であるように思われます。

5 おわりに

島崎藤村は、木曾の田舎者は都会のエリートに学ばなければならないという世の中の常識を疑いました。ヨーロッパやアメリカの物質文明よりも日本の精神文明がすぐれているという日本人の発想を疑いました。女性は家の中で男に尽くすべきだという日本社会のしきたりに対しても違和感を唱え、女性が学ぶことの大切さを説きました。

この蘇南高校は、このような島崎藤村の家族やその友人たちが活躍した木曾・中津川という「記憶の地層」の上に建っています。

島崎藤村の後に続く、地域の「後輩」として、是非「かなしみの奥のほほえみ、涙の奥の笑」を見つめられる人間になってほしい。私自身もそうありたい。令和3年度の終始業式にあたり、このことを皆さんに呼びかけます。

【参考文献】

- ①島崎藤村『夜明け前』全4巻（岩波文庫、1969年）
- ②島崎藤村『千曲川のスケッチ』（新潮文庫、1955年）
- ③島崎藤村、十川信介編『藤村文明論集』（岩波文庫、1988年）
- ④島崎藤村『生ひ立ちの記 他一篇』（岩波文庫、1943年）
- ⑤北小路健『木曾路文献の旅——『夜明け前』探究』（芸艸堂、1970年）
- ⑥上條宏之『変革における民衆——『夜明け前』の実像』（銀河書房、1994年）
- ⑦梅本浩志『島崎藤村とパリ・コミュニケーション』（社会思想社、2004年）
- ⑧十川信介『島崎藤村』（ミネルヴァ書房、2012年）
- ⑨宮地正人『歴史としての『夜明け前』』（吉川弘文館、2015年）
- ⑩川村肇『読み書きは人の生き方をどう変えたか』（清水書院、2018年）